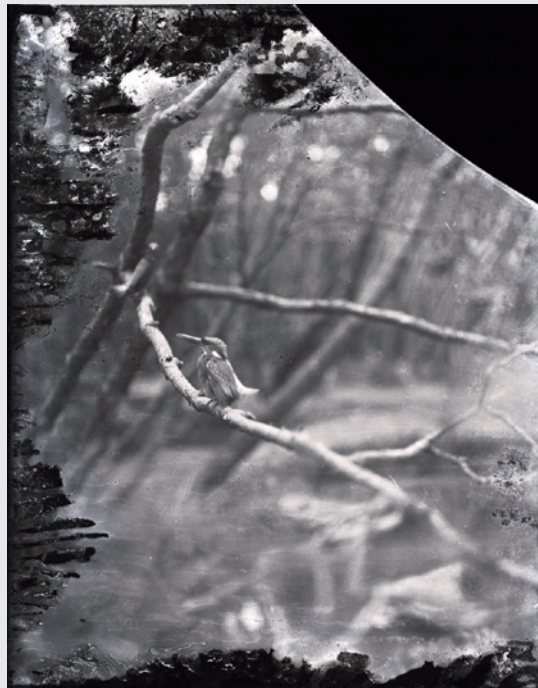


100 年前にカワセミを撮った男・下村兼史
－ 日本最初の野鳥生態写真家 －

インタビューシリーズ・第1弾
「下村兼史の人と作品を語る」
(特別編)

ゲスト：平岡 考 氏
(公益財団法人 山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクター)



《カワセミ》1922年1月5日 佐賀県佐賀市
撮影：下村兼史 所蔵：(公財) 山階鳥類研究所

目次

- 最先端にあった下村の知識と情報 ____ p.3
- 托卵から見る進化の過程 ____ p.4
- 鳥の卵の不思議な力 ____ p.5
- ヒトという生物の生態から見た「新しい生活様式」 ____ p.6

本プログラムについて

フジフィルム スクエアは、価値の高い写真作品を銀写真プリントで展示し、ご来館者に写真作品との出会いの場をご提供しています。また、作品への理解をさらに深めていただくために、ギャラリートークや講演会等の鑑賞サポート活動に力を入れており、2019年度には1万4千人以上の方々にご参加いただきました。

現在は新型コロナウイルスの影響で、写真展会場で行う鑑賞サポート活動は見合わせておりますが、新たな関連プログラムとして、特別ゲストへのインタビュー記事を公式ウェブサイトにて公開してまいります。

ご来館いただき写真展をご鑑賞いただいた方にも、ご来館されておられない方にも写真の魅力を知っていただき、作品制作の背景や意図等への理解を深め、お楽しみいただける機会となれば幸いです。また、本インタビュー記事が写真文化の価値を将来に伝えていくための有益な資料となることを願っています。



ゲストの平岡 考 氏（公益財団法人 山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクター）

コロナ禍で開催中止となったギャラリートークに代えて、山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクターの平岡 考 氏に下村兼史展の会場でインタビューを行いました。

前編、後編では下村兼史の人と作品についてお話を伺いましたが、下村についてのさらに詳しいお話と、コロナ禍における「新しい生活様式」について、平岡さんから貴重なお話をいただきましたので、今回は特別編としてご紹介いたします。

最先端にあった下村の知識と情報

—— 下村が野鳥を撮影していた 1930 年代というのは、海外での鳥の研究や、撮られている写真のことなどは、やはり限られた人しか知り得なかったものでしょうか。

平岡 そう思います。下村は農林省の鳥類学者と一緒に仕事をしていたこともあり、海外の論文なども読んでいたと思うんですね。先ほどお話した、カッコウがどうやって巣に卵を産みこむのかの話（後編参照）やブラインド（前編参照）についてもそうですが、そういうところから知識や情報を得ていたのではないかと思います。

—— その世界では、研究者としても最先端に属していたということですね。

平岡 下村の著書を読んでみると、今でも安心して読めるということを感じます。その理由はおそらく、当時の最新の知識を知っていたことと、それに合わせて自分の頭で独自に考えていたということにあるのだと思います。今読んでも荒唐無稽なことは書いていないんですね。

托卵から見る進化の過程

—— 托卵の話に戻りますが、托卵を映像で記録するのは、今でも難しいそうですね。

平岡 カッコウの仲間の研究者に聞きますと、今でも大変だと言います。托卵相手となりうる巣はあちこちにあって、たくさん巣があっても全部に卵が産み込まれるわけではなく、どこに産むかわかりません。しかも、托卵の所要時間はごく短いので、その場でちゃんと準備ができて映像を撮るのは難しいんです。

—— 当時の機材では、なおさらということもありそうですね。

平岡 今であれば、小さなアクションカメラを10台も20台も用意したりして撮ることもできなくはないでしょうが、1930年代にはもちろんそんなことはできません。

—— それと、疑問に思ったのは、托卵される種も自分たちの卵を孵さないで種が途絶えてしまいそうです。そのバランスはどう保たれているのでしょうか。

平岡 確かに托卵というのはいいことばかりじゃないんです。托卵が全部うまくいってしまうと、仮親の種が減ったり、絶滅したりするかもしれません。そうなっては托卵する側も元も子もありません。

—— そうですね。

平岡 実は、実際にはそうはならないんですよ。仮親がいなくなってしまうほどには托卵はやりようがな



托卵について解説する平岡氏

ということと、もうひとつ、仮親の方も卵の様子がちょっと変だと気づき、放り出したりする個体が出てくることがあるんです。

—— 学習するということでしょうか。

平岡 動物は色や形ばかりでなく、行動も遺伝するのです。この場合でいうと、どうも神経質な性質は遺伝するようなのです。卵の細かい違いに違和感を持ってそれを放り出す個体が出現すると、そういった個体の子がうまく巣立ち、そうでない個体は子を残せませんので、卵について神経質な個体がどんどん増えていくことになります。その一帯にいる仮親の、例えば、ホオジロならホオジロがカッコウの卵を放り出す習性がそのように遺伝によって広まると、カッコウは減ってしまいます。

—— 確かにそうなりますね。

平岡 一方、カッコウもどのくらいホオジロに似た卵を産むのかは、個体によって少しずつ違います。ホオジロが見分けられないほどそっくりの卵を産む性質の個体だけが、ホオジロの放り出し作戦をかいくぐって子孫を残してゆくということが起こるのです。

—— なるほど。

平岡 そうすると、一旦減ったカッコウがまた増えるということが起こります。遺伝がおもな原動力となって、行動だったり、卵の色彩が変わっていっていると考えられるわけです。種の中の相互関係が、あたかもお互いに対策を取り合っているかのように、だんだんとエスカレートしてゆくのです。比喩的に軍拡競争などといわれます。ちなみに、過去にはカッコウが盛んに托卵していたホオジロは、現在、卵の細かい違いに気づく能力がとて高くなっています。カッコウは托卵しても成功しなくなり、カッコウは別の種に托卵するのが主流になりました。

—— よくできていますね。進化のようなことですか。

平岡 まさに進化するわけです。意図してやってるわけではないのですが、あたかも意図しているかのように、行動や卵の色などが変化して、それが広まっていくということがあるわけです。生物の進化の研究対象として、托卵に注目している生物学者がたくさんいます。進化が起こっている過程を知る実例になっているのです。

鳥の卵の不思議な力

—— ちなみに、野鳥の巣や卵は、今では撮影マナーとして撮ってはいけないことになっているので、注意しなくてはなりませんね。

平岡 そうですね。本来はなるべくそっとしておいた方がいいのです。研究者でも気をつけていることです。興味本位で巣を覗いたりして鳥をびっくりさせて、子育てを失敗させることは避けなくてはなりません。



野鳥の巣と卵について解説する平岡氏

—— 下村も研究として、野鳥の巣や卵を撮っていたのですか。

平岡 当時は、今と違ってあちこちに鳥を観察している人がいるわけではありませんでした。その意味で、下村も「確かにここに繁殖していた」という証拠を残すことを今よりずっと重視していたでしょう。

—— 鳥の巣というのは、種によって材料や形がそれぞれ異なり、個性的で美しく、芸術作品のようですね。

平岡 下村も写真を撮ることで、そういう造形も見ていたのではないのでしょうか。鳥の卵というのも不思議な存在です。昔、職場の同僚に農家出身の方がいたのですが、彼が言うには、鶏小屋で鶏の卵が生まれているのを見つけると、とっても気持ちが高揚するというんですよ。

—— 何だかわかる気がしますね。

平岡 野鳥の調査をしていても、卵には不思議な魅力があると感じます。

ヒトという生物の生態から見た「新しい生活様式」

—— 少し脱線してしまいますが、このコロナ禍で言われ始めた「新しい生活様式」について、平岡さんのように鳥や生物を研究している方々は、どのように捉えていますか。

平岡 実は「新しい生活様式」と最初に聞いた翌日くらいに、フェイスブックに感想を書いたんです。その

時「いつまで」というのが提示されていなくて、これからずっとそうですと言わんばかりの示され方でしたよね。

—— そうでしたね。

平岡 例えば「5年後くらいにはワクチンもできるだろう、特効薬もできるだろうから、当面5年間ほど我慢してください。その時ダメならまた考えましょう」というのではなくて、期限を限らずに「新しい生活様式」だと言われていたんですが、それは、ヒトという生き物の生態という見地から考えると違和感がありましたね。

—— 具体的にはどんなことですか。

平岡 我々は群れになって互いにコミュニケーションしながら餌を食べるということを、おそらくヒトになるより前の時代からやっているわけです。実際にみんなでおしゃべりしながらごはんを食べると食が進むというのがありますよね。それはやはり、私たちの中にプログラムがあり、理屈だけを考えて、変えることができることではないと思うんですね。

—— 確かに思い当たる経験があります。それは単にそんな気がするということ以上のものなのですか。

平岡 例えば、メダカに餌をやるときに一匹だけ飼っているメダカに餌をやると、群れで飼っているメダカに餌をやるとでは、群れで飼っている方が餌の食いがいいことが知られています。この現象にはちゃんと「社会的促進」という学術的な名前もついています。それは理屈ではなく、群れで生きている生き物の中



平岡氏

にプログラムとしてあるものと考えられるのです。

——なるほど、そういうことなんですね。

平岡 ですので、「新しい生活様式」という理屈で、これからずっと「少人数でおしゃべりせずに黙って横に並んで食べなさい」といっても、期限なしではできないわけないよと、私は聞くなり思いました。とはいえ、感染のリスクはあるので、感染症の先生に言わせれば、できれば一人一人で食べてくださいということになるのですが、やはり、こういったときに感染症の専門家だけではなくて、動物行動学や霊長類学の研究者も含めて話し合わないと、名案が出ないのではないかというふうに思いました。

——興味深いですね。意識して変えられることと、動物として変えられない本能的な部分があるわけですね。

平岡 多くの方は、鳥の研究なんて道楽でやってるんだろう、そんな研究、何の役にも立たないのじゃないかと思っているに違いないと思うのですが（笑）やはり、鳥やメダカを調べることでヒトとはどういうものがわかるということが、生物学を研究する大きな意味だと思うのです。外国に行くとき日本という国がよりよく見えてくるのと同じように、他の生き物を知ることは人間をよく知ることだと思います。鳥の研究者は、鳥がどんな生き物かを調べていますが、それは、生き物全体がどんなものかを知ることにもつながっていますし、またヒトも生き物なわけなので、ヒトとはどんな生き物かを知ることでもあるはずですよ。

——コロナ禍で、下村兼史展も3ヶ月遅延しての開催となりましたが、自然と人間との関係を考えるきっかけとして、あるがままの自然や野鳥をとらえた下村の写真も現在の情勢と無関係ではないような気がします。平岡さん、今日は貴重なお話をありがとうございました。

平岡 ありがとうございました。

聞き手：大澤友貴（フォトクラシック）

● ゲストプロフィール

平岡 考（ひらおか・たかし）

山階鳥類研究所自然誌研究室専門員・広報コミュニケーションディレクター。

標本管理を長く担当した後、2005–2008年、下村兼史の写真資料に関する整理保存作業、調査研究に携わる。2018年、「下村兼史 生誕115周年 – 100年前にカワセミを撮った男・写真展」（主催：山階鳥類研究所）実行委員。現在、広報担当者として広報紙「山階鳥研ニュース」やウェブサイトでの発信などを担当。

フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展
関連プログラム

100年前にカワセミを撮った男・下村兼史 – 日本最初の野鳥生態写真家 –

インタビューシリーズ・第1弾

「下村兼史の人と作品を語る」（特別編）

ゲスト：平岡 考 氏（公益財団法人 山階鳥類研究所・広報コミュニケーションディレクター）

展覧会

会場：フジフィルム スクエア 写真歴史博物館

会期：2020年7月1日（水）– 9月30日（水）

主催：富士フィルム株式会社

特別協力：公益財団法人 山階鳥類研究所

協力：公益財団法人 日本野鳥の会、有限会社バード・フォト・アーカイブス

監修：公益財団法人 山階鳥類研究所

後援：港区教育委員会

企画：フォトクラシック

記事

公開日：2020年8月20日

発行：富士フィルム株式会社 宣伝部

編集：フォトクラシック

デザイン：脇野直人

© 富士フィルム株式会社 禁無断転載